

優秀賞

三歳児のスイミー

小林 伸太郎

柳田先生、はじめまして。九月になってもまだ残暑が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。

私は結婚を機に南千住にきました。それから五年が経ちますが、その間子どもが二人生まれ、仕事の傍ら、家事・育児と充実した毎日を送っています。自由業で時間を自由に使えるため、空いた時間を使って地域の子どものために二年前から図書館での読み語りや保健所で三歳児へ絵本を渡すボランティアをしています。

保健所で渡す絵本は柳田先生が選ばれた絵本であると伺ってありました。初めてそれらの絵本を見た時に、「これは三歳児には難しすぎる。三歳児には『きんぎょ

がにげた』のような親子で遊べる本や『ももたろう』のような簡単な昔話の方が良いのではないか。」と感じました。実際に絵本を渡すときに、

「これ三歳児には難しすぎない？」

と聞かれたこともありました。そんな時、

「今はまだ難しいと思います。でも、二年後には分かるようになると思いますので、もう少し大きくなったら親子で読んで下さいね。」

と言っていました。

先日、三歳になった息子が健診後に絵本をもらってきました。もらってきた本は

「スイミー」

でした。私が小学二年の国語の時間で習ったお話なので、「これは時期が早すぎる。正直これだけはもらってきて欲しくなかったのに。」

と思いました。しかし私の思いとは裏腹に、きれいな魚の本をもらい、生き物に興味津々の息子の目は輝いていました。

「お父さん読んで。」

と無邪気に言われて私も自然と息子を膝に乗せ読んでいました。初めのうちは、絵に夢中になって、ストーリーについて良く分かっていないようでした。しかし、私や妻が何度も読んだり、説明したりしている内に何となくどんなお話なのか理解できてきたようです。

0歳から「もこもこもこ」などの絵本に触れていましたが、親の協力を得ながらも三歳でスイミーが分かるようになるとは驚きの出来事でした。後で知りましたが、同じ本でも一人で読むのと、読み語りするのでは対象年齢が異なるということでした。その辺りを踏まえて柳

田先生は

「親子で楽しく触れ合いながら何度も読めば十分伝わる絵本を選びましたよ。」

という気持ちで選書されたのかなと気づきました。そして、これからは絵本が難しすぎるのではないかと聞かれたときは、

「一度では伝わらないかもしれませんが、親子で楽しくふれ合いながら何度も読めば、理解できる内容の絵本ばかりですよ。」

と伝えようと心に決めました。

先生が選書された絵本のお蔭で色々気づかせていただきました。ありがとございました。これから子ども達との絵本タイムを楽しみたいと思います。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

小林さんは、幼い子が物事を理解するようになっていくプロセス

スについて、とても大事なことに気づいてくださいました。

乳幼児期の感性の鋭さと理解力の発達については、最近の乳幼児精神保健学の発達によって、ずいぶんとわかってきました。それによりますと、まだ自分の気持ちや思いを十分に言葉で表現できない乳幼児期の子どもであっても、身近な人（特に母親）の心の動きを感じ取ったり、家族の人間関係を理解したり、周囲で起きていることが喜ぶことなのか悲しいことなのかといった、生きていくうえで大事なことは、しっかりと感じ取っているということです。

ちなみに、母親がパニックになったりひどくふさぎこんだりしているときとか、父親が母親に暴力を振うといったDVが生じると、0歳児であっても、事態の深刻さを察知して、時には《自分のせいで親が困っているのだ》と思いこんで、心を閉ざして感情の表出をしなくなるいわゆる「抑圧」という状態に陥るといいます。外見的には、表現のない蠅人形のようになってしまうのです。

す。

幼い子の感覚というものは、本当に鋭いのです。しかし、自分の感情や思いを言葉で表わすことができないから、大人は幼い子は何もわかっていないと、勝手に思いこんでしまいます。その感覚の鋭さを、逆によい方向に向けると、子どもの心——感性と理解力は、どんどん発達するのです。

小林さんの三歳の息子さんが、絵本『スイミー』を読んでもらったとき、「絵に夢中になって」いるだけのように見えたということですが、おそらくキラキラする色彩に興味を引かれたのは間違いにしろ、父親の読み聞かせの声のトーンの様子から、何か小さな魚たちに危険が迫っているとか、一匹一匹は小さくてもみんなが集まって大きな魚の形をつくると、力強い感じになって襲われなくなるといったドラマティックな展開を、ぼんやりとながら感じ始めていたのではないのでしょうか。もちろん私の想像ですが。

その読み聞かせの言葉は、頁ごとの絵の変化と重なり合いますから、何回も繰り返すうちに、ドラマの展開をはっきりつかめるようになっていったということでしょうか。

ここではつきりと見えてくるのは、子どもの理解力は、気に入った絵本の読み聞かせを繰り返すことによって、明確になり、一度そういう経験をする、その子はどんどんほかの絵本の読み聞かせをしてもらうことで、理解力の急速な発達が見られるようになるということです。

小林さん、すばらしい報告を知らせてくださりありがとうございます。このエピソードは、幼少期における絵本の読み聞かせの意義を広く知ってもらう恰好の事例となるでしょう。